

グローバル研究の課題と展望

—社会科学における学際的議論に関する一考察—

太田 有子*

I. 問題の所在

本稿は、近年のグローバル研究（Global Studies）に関する研究動向を概観するとともに、グローバル研究の意義と課題について論ずる試みである。グローバル研究は、グローバリゼーション（globalization）をめぐる議論を通じて生じていることから、本稿では、グローバリゼーションならびにグローバリゼーションに関わる諸現象に対する認識のあり方をめぐる議論が、学際的に発展している状況を概観するとともに、社会科学における既存の概念の再考や既存の研究分野の再編を促していることについてもふれつつ、これまでの論点と今後の課題について検証する。

グローバリゼーションの定義や起点をめぐるのは、多くの研究者の間で議論の対象となっている。グローバリゼーションに関する主な議論では、特に 20 世紀後半以降の交通・通信手段の発達等による地球規模の交流活動の加速化とその影響が注目されているが、より長期的な視点からグローバリゼーションを捉え直す議論も生じている（Robertson 1992=1997; Sassen 2006=2011; Hunt 2014=2016）。グローバリゼーションを長期的視野で捉える視点は、グローバリゼーションを社会現象として捉える傾向にあった従来の見解とは一線を画し、社会変動の一形態として、変化の動態についてより歴史的・通時的な分析を促している。さらに、グローバリゼーションの影響については、特定地域における活動や価値規範が、政治・経済活動における優位性と連動し、他地域に拡散するなかで世界が同質化・画一化していくという見解がある。一方で、グローバリゼーションを通じて、文化の流動性が高まり、相互作用を通じて、多様性が生じる点をはじめ、地域特有の事情や文化的要素が有意性を持って作用するという指摘もされている。（Appadurai 1990, 2001; Robertson 1992=1997）。

グローバリゼーションをめぐる議論を通じて生じた多様な見解は、社会科学におけ

* 早稲田大学 留学センター 准教授

る学問分野を超えて共有されるとともに、グローバルな視点で分析を試みる研究として、従来の国民国家の領域内に収まらない現象や長期的な変動を分析する研究が生じている。さらにグローバリゼーションに関する議論は社会科学における既存の概念をグローバルな視点で改めて検討することを促している。グローバリゼーションに伴い、「国家」・「市民社会」のあり方や「市民」の役割はどのように変化しているのかといった問いとともに、グローバルな文脈における定義や位置づけをめぐって議論の対象となっている。上述の議論を通じて、既存の概念や分析枠組みが問い直され、学際的な視点による研究の進展とともに、研究分野の再編が生じているといえる。

上述の状況をふまえ、本稿では、近年のグローバル研究（Global Studies）に関する研究動向を概観し、グローバル研究が、社会科学においてどのような研究上の意義をもたらしたか、また分析においてどのような課題があるかといった点とともに、今後の方向性を論ずることを目的としている。本稿では、「グローバリゼーション（globalization）」を越境的に拡大する関係性の形成と変容の過程と定義し、グローバリゼーションに伴うローカル（Local）・国家（National）・地域（Regional）・地球規模（Global）といった諸相における交流の過程とその影響について長期的かつ多層的な視点で分析する研究を「グローバル研究（Global Studies）」とする。特にグローバリゼーションと「国家」、「市民社会」との関係性をめぐる議論やその歴史的過程に注目する研究動向にふれながら、グローバル研究の進展が、社会科学における既存の概念や認識のあり方にどのような変化をもたらしているかについて述べるとともに、今後のグローバル研究の課題と方向性について考察する。

Ⅱ. グローバリゼーションと「国家」・「市民社会」

—グローバル研究における学際的議論—

グローバリゼーションならびにグローバリゼーションに関わる諸現象に対する関心や議論が学際的に共有されるなか、社会科学における既存の概念も改めてグローバルな視点で捉え直す議論が生じている。これまで主要な概念として扱われてきた概念についても、グローバリゼーションとの関連で議論されるようになってきている。以下では、特に社会科学における主要な概念とされてきた「国家」・「市民社会」概念に対する認識が、グローバリゼーションに関する議論のなかで、どのように位置づけられ、グローバリゼーションに対する認識やアプローチとどのように関連しているかをを中心に議論する。「国家」・「市民社会」概念をめぐる議論に注目する理由としては、社会科

学において重要な概念として認識されているに加えて、グローバリゼーションと「国家」・「市民社会」概念をめぐる議論を通じて、グローバリゼーションに対する認識に関する相違点をはじめ、グローバル研究の主要な論点を明示しうることが挙げられる。グローバリゼーションとの関係における「国家」・「市民社会」概念に対する認識をめぐる議論を通じて、グローバル研究における主な論点を示すとともに、研究上の意義や課題についても論じる。

1. グローバリゼーションと「国家」

社会科学における学問分野の成立以来、各学問分野において、国家は主要な分析単位として捉えられ、国家領域内の現象を分析する研究が中心的な存在となってきた。しかしながら、社会科学分野における研究の一つの潮流として、従来の国家を中心とする分析枠組みを問い直す動きとともに、国民国家の領域に収束しない越境的な現象や活動に光を投射する研究が生じている。グローバリゼーションと国家を対置するものとして捉え、グローバリゼーションの進展は、国家の衰退につながるという見解がある一方で、国家と越境的な諸活動の連関を相対的な視点で捉え直す研究も生じている。このような一連の議論のなかで、改めてグローバリゼーションとの関連で国家の位置づけが議論されることとなり、国家に対する認識をめぐる議論が生じている。

グローバル研究の代表的な研究者である S. サッセン (Saskia Sassen) は、グローバリゼーションに伴う越境的な関係性や地球規模で拡大する諸活動と国家内部における諸制度の再編成を連続的に捉える必要があることを論じている。(Sassen 2006: 13=2011: 30-31)。サッセンは、グローバリゼーションの進展に伴い、国家の領域内における諸活動に対する国家による関与のあり方が変容している点を指摘しつつ、その変化は必ずしも国家の衰退を示すものではなく、国家の役割の変化や制度の再編成として捉えている。さらに国家および国家の活動領域の変化自体が、グローバリゼーションの原動力になっていることを指摘し、越境的な経済・社会活動を通じて、国家の領域内における諸制度、資源の配置の再編が生じているとしている。また、国家の領域内における資源をめぐる対立や地域横断的に発生している紛争の多くは、地球規模の事象と連動していることから、グローバルな現象と国家の連関を多層的に捉える必要性を論じている (Sassen 1999=2004: 77-80, 2006: 3-4=2011: 21)。さらに近年の研究では、国家の再編・変容がグローバリゼーションと密接に関連していることを歴史的分析を通じて示す試みを行っている。サッセンによれば、国民国家を構成する

要素の一部が変容および再構成される過程をグローバリゼーションとして捉えている (Sassen 2006: 21=2011: 40)。グローバリゼーションと国家の相互的連関に関するサッセンの指摘は、従来のグローバリゼーションに伴い、国家の意義や役割が衰退するという見解に対して、グローバリゼーションを国家との関係のなかで相対的に捉える試みといえる。さらにグローバリゼーションと国家との関係の動態を分析することで、グローバリゼーションを社会現象としてではなく、より長期的な社会変動として捉える認識を示したともいえる。

R. ブルーベイカー (Rogers Brubaker) もまた、グローバリゼーションに伴い、国家の意義や役割が縮小するという見解に対しては疑義を示し、グローバリゼーションという事象自体が、国民国家の成立・発展と連動していると述べている。具体的な事例として、人々の越境的な移動に伴い、国民国家に対する帰属意識をめぐる課題が、継続的に論じられている状況とともに、その議論が様々な媒体を通じて拡散し、越境的なナショナリズムとして顕在化していることを指摘している。ブルーベイカーは、上述の状況もふまえ、越境的な活動をはじめとするグローバルな事象を対象とする研究の進展は、必ずしも従来の国民国家をめぐる枠組みを前提とした認識の視座に質的な転換をもたらしているわけではないとしている (Brubaker 2015=2016)。サッセンとの比較において、両者ともに、グローバリゼーションにおける国家の意義や役割を重視しているものの、サッセンが、グローバリゼーションとの相互作用の過程において国家の再編と動態を議論しているのに対して、ブルーベイカーは、グローバリゼーションとの連続性のなかで、国家を基軸とした分析枠組みを示していることが挙げられる。

また政治思想分野の研究者である J. コーヘン (Jean Cohen) は、グローバルな文脈において、国家の意義や役割が持続的に意義を持ちうることを指摘するとともに、グローバリゼーションに伴い、グローバルな課題に関する問題関心は、国家内部の領域にも波及しつつ、共有されつつある状況を指摘している (Cohen 2012)。グローバリゼーションに伴い、国家領域内に収束しえない課題の共有とともに、国家領域内の公共的課題の変容が認識されているといえる。

グローバリゼーションと「国家」の関係性について、学際的な議論が進行しているなか、上述の研究者は、グローバリゼーションの進展は、必ずしも「国家」の後退を示すものではなく、国家の関与のあり方の変化を促している点を指摘するとともに、グローバルな文脈における「国家」の意義を再検討している。従来の「国家」概念の

定義を継承し、グローバリゼーションとの連続性を示す見解がある一方で、「国家」概念自体の定義の再構成を行いつつ、グローバリゼーションとの相互作用的な過程において捉える認識も示されている。さらに「国家」を取り巻く環境の変化とともに公共的な課題が国家の領域を超え、公共領域自体が越境的に拡大していることに伴い、より多様な主体が関与する状況のなかで、国家の役割や管轄内容が再構成されつつあることも指摘されている。国家の領域に収束しえない課題について、グローバルな文脈で「公共性」が論じられることで、国家に関する認識とともに、市民社会のあり方も問われているといえる。

2. グローバリゼーションと「市民社会」

グローバリゼーションと国家の関係が議論される一方で、グローバリゼーションは、「市民社会」とどのような関係にあり、市民・市民権に対する認識にどのような影響をもたらしているかについても議論の対象となっている。従来、「市民社会 (civil society)」という概念自体、「国家 (state)」と対置される存在として認識され、民主主義の理念と結びつき、民主化の過程において実現されるべき対象とされてきた。近年、グローバルな視点で公共の課題が議論されるにあたって、政府・企業・非政府組織 (NGO/NPO)、市民団体等をはじめとする様々な主体の役割・関係に関する議論が生じており、改めて非政府組織の意義や一般市民の役割も注目されるようになっていく。以下では、グローバリゼーションと「市民社会」に関する議論にふれるとともに、現代社会における市民のあり方に関する認識への影響について論じる。

前掲のサッセンは、近代の諸制度の象徴としての「市民権 (citizenship)」が、グローバリゼーションとの関係において、どのように再定義されつつあるかについて論じている。従来の国民国家の枠組みに収束しない活動と諸権利をどのように位置付けていくかという課題について、近年の議論を精査し、国民国家の制度的前提に依拠しながら、多文化的方向に活路を見出す議論がある一方で、国民国家の領域を超えた市民の役割に注目する研究が増えていることを示すとともに、「市民権」の可変性を指摘している。例えば、地球規模の課題に対する関与をはじめ、グローバルな文脈で政治的な主体として市民ならびに市民権を捉えていく姿勢が生じており、「人権」概念が市民権をめぐる議論と結びつくかたちで活発化している点を指摘している。既存の市民権をグローバルな文脈で捉えた場合に生じる課題をめぐる議論に応じるかたちで、市民権の対象や内容が変化していることを指摘し、市民権の可変性自体に今後の可能性

を見出している (Sassen 2006=2011)。さらにサッセンは、グローバリゼーションに伴う国家と市民の関係の変容とともに、従来の政治過程において認知されていなかった存在も参画しうる可能性をはじめ、新しい政治主体の出現にも言及している。サッセンによれば、グローバリゼーションの過程で、国家政府による市民への関与や責任が縮小し、政府と市民の対話や相互関与の機会が減少する一方で、公的領域から排除されてきた集団の権利・主張も共有される空間が生成されつつあることも指摘している (Sassen 2006: 319-321=2011: 348-350)。前述のコーヘンもまたグローバリゼーションに伴い、国家の領域を超えたグローバルな公共領域の生成について述べるとともに、国際機関、非政府組織をはじめとする政治主体の多様化による、多元的な政治主体の可能性にも言及している (Cohen 2012)。グローバリゼーションに伴い、国家の領域内における行政機構と市民との関係を通じて生成する公共圏から、国家の領域を超えるかたちで様々な主体が参画する公共領域が生成しているといえる。

国民国家における成員としての市民的権利の拡大という過程に代表されるように、国民国家と市民社会、ならびに市民権の制度化は、歴史的に不可分の関係にあるとされているが、J. アーリ (John Urry) は、上述の関係を改めてグローバルな視点で捉え直す議論を展開している。アーリによれば、市民権は、必ずしも国民国家の領域内のみで制度化されるものではなく、国家の領域を超えた公共的課題における当事者意識や責任が問われ、市民の役割を見つめ直す議論とともに、新しい視点からその意義が認識されつつあることを指摘している。国民国家が共同体としての意識を共有する過程を有していたように、グローバリゼーションに伴い、「グローバル市民 (global citizen)」としての意識の生成が生じているとしている。さらに、国民国家の領域を超えた活動や地球規模のネットワークの拡大をはじめ、社会空間の変化に応じて、市民権の目指す内容が人権、環境をはじめ多様な価値志向など様々な分野における権利を含んでいることを示している。アーリによると、グローバル市民 (global citizen) は、特定の国家・民族・集団に拘束されない志向性とともに、グローバル社会における公共益を実現する主体として認識されており、一方で従来の国民国家における「市民権」とも並存しつつ、公共的な領域の一部が、国家からグローバル社会へと移行しているとしている (Urry 2000=[2006] 2015)。

上述の研究者は、いずれもグローバリゼーションという事象を「国家」との関係で連続的に捉えつつ、従来の国民国家の内部で制度化された市民権を持つ市民とは異なる性質と志向性を持った市民像として「グローバル市民 (global citizen)」、「グロー

バル・シチズンシップ (global citizenship)」概念が生起していることを指摘している。さらに「市民社会」概念の発展形として「グローバル市民社会 (global civil society)」といった概念の生成とともに人権に関する課題、環境問題に代表される地球規模の課題、越境的な事象および活動等、国民国家の領域に収束しえない課題を共有し、課題解決に向けて主体的に協働していく行動規範を持つ主体として新しい市民像が共有されつつあるといえる。

Ⅲ. グローバリゼーションと社会変動ーグローバル研究の歴史的転回ー

グローバリゼーションに関わる諸現象を長期的視点でその経時的変化の過程の分析を試みる研究が漸増しているが、グローバリゼーションの起点や過程に対する認識をめぐっては、長期的な視点によるアプローチを重視する研究者の中でも議論が続いている。サッセンによる「国家」の領域の形成とグローバリゼーションの過程に関する分析は、社会現象としてではなく、社会変動としてグローバリゼーションを捉える視座を示したといえるが、サッセンは、現代のグローバリゼーションを20世紀終盤の国家の制度編成の変容を伴う経済活動の拡大と経済システムの形成として捉えている (Sassen 2006=2011)。一方で、歴史学研究者のL. ハント (Lynn Hunt) は、グローバリゼーションを世界が相互に関連し、依存していく過程として定義するとともに、近年の越境的な活動・移動、情報共有の加速化といった諸現象のみに注目するのではなく、より長期的な視点で、グローバリゼーションを歴史的過程として捉えることを提案している。さらにハントは、歴史的には多くの事象がグローバリゼーションの一過程として捉えられるものの、「グローバリゼーション」が学術的にも一般的にも認識されるようになった背景として、近年のグローバル経済の活発化に伴う世界秩序の再構築を説明しうる用語として用いられるようになったことを指摘している (Hunt 2014: 44-46, 53=2016: 47-49, 56)。つまりグローバリゼーションは、歴史的過程として進行していたものの、グローバリゼーションに対する認識の共有は、近年の現象であるとしている。

グローバリゼーションに対する認識をめぐる議論は、社会科学における既存の分析枠組みに関わる議論として発展し、また長期的な社会変動としてグローバリゼーションの動態の理解を目指す試みは、学問分野を超えて進展し、学際的な研究分野としての「グローバル研究 (Global Studies)」の生成とともに、既存の学問分野における新しい研究領域の発展、再編の動きも生じている。例えば、グローバル社会学 (Global

Sociology) の創設とともに、従来の国民国家の領域内の社会現象の説明にとどまらな
ない事象、世界規模での人口問題や人口移動、社会格差、環境等、様々な事象をグ
ローバルな視点で説明する試みや、世界諸地域の事例比較を通じて多様な状況を示す
試みは、その一端といえる。また前掲のサッセンの研究もグローバルな経済活動を社
会学研究として分析を行い、また都市の動態を分析の中心に据えることで、従来の社
会科学の分析枠組みの再考を促した研究の一例といえる (Sassen 2001=[2008]
2012)。

また歴史学者のハントは、従来の歴史学研究においては、国民国家の枠組みに依拠
した研究が中心であったが、1990年代以降、越境的な移動の経験や地域間の交流へ
の注目をはじめ、グローバルな問題関心による分析が浸透しつつあることを指摘して
いる。グローバルな視座を持つ研究の発展は、多様なアプローチの生成を促しており、
グローバリゼーションに対する問題設定・分析視角の相違をはじめ、研究者の間で多
様な認識が生じていることも指摘している。グローバルな文脈で歴史を記述する試み
のなかでも、巨視的な志向性を持つ研究が、経済変動から一義的にグローバリゼーシ
ョンの拡大を説明することを目的とした理論構築を試みる傾向にあることに対して、ミ
クロ的な視点から越境的な関係性の分析を中心に行う研究は、様々な観点で史料の分
析を行う傾向にあるとしている。いずれの場合にも歴史経験の分析を通じて一般化を
目指す姿勢は共有されるものの、ハント自身は、後者のように多元的な視点から、相
互作用の過程の理解を試みる研究の意義を評価している。ミクロ的なアプローチによ
る研究は、グローバリゼーションに対する従来の評価を修正し、グローバリゼーシ
ョンが必ずしも一方向的に同質化を促すものではなく、むしろ双方向的な関係や交流に
よるダイナミズムの過程であることを論じている (Hunt 2014=2016)。

グローバル研究の影響として、上述のように、ミクロな視点から、特定の地域にお
ける関係性に注目しながら、グローバルな文脈でその動態とその理解を試みる研究は
歴史・地域研究でも顕著に見られるようになってきている。日本研究の代表的研究者であ
る A. ゴードン (Andrew Gordon) は、近年の研究において、A. アパデュライ (Arjun
Appadurai) の議論を引用しながら、グローバリゼーションとは、地域の実情に応じ
て、経済・社会・文化活動の実践を通じて浸透し、ローカル化する過程 (localizing
process) としている (Gordon 2012: 5)。

グローバリゼーションに対する認識をめぐる議論は、既存の学問分野における分析
枠組みに関する議論に発展し、社会科学における各学問分野において、よりグローバ

ルな視点で分析を試みる研究として、従来の国民国家の領域内に収まらない現象や長期的な変動を分析する研究が生じている。社会科学の各分野におけるグローバルな視点による事例の分析は、グローバリゼーションの過程や影響の多様性を明らかにしており、今後も様々な地域の事象およびその変化の分析を通じて、新たな知見を提供していくことが目指されている。

IV. グローバル研究の展望

グローバル研究（Global Studies）は、社会科学の各学問分野において、グローバリゼーションに対する認識や評価に関する議論から派生しつつ、グローバルな視点を導入する研究として発展したといえる。グローバル研究は、現代社会理論の潮流の一つとされる一方で、学問分野として研究上の意義や課題について必ずしも検討されてはなかったといえる。グローバル研究の意義としては、グローバリゼーションに関する議論が進展し、長期的な社会変動としての理解が深まったことが挙げられる。これまでの議論から、グローバリゼーションに対する分析視角（アプローチ）として、グローバリゼーションを社会現象として捉えるのではなく、社会変動として経時的な変化を捉える視点とともに、地域の個別事例における変化の過程を分析する研究、より多層的な視点を志向する方向性が共有されつつあるといえる。特に近年では、長期的な視点からグローバリゼーションを既存の政治・社会体制との連続性や相互作用のなかで相対的に捉える試みが生じている。グローバリゼーションは、必ずしも標準化・同質化とは同義ではないという見解は、グローバルな視点による研究を通じて共有されつつあり、グローバリゼーションの影響については、一方向的に捉えるのではなく、多方向的に拡散しているものとして捉えていく認識が共有されている。

グローバル研究の発展は、既存の概念をグローバルな文脈で捉え直すこととともに社会に対する従来の認識を新たな視点から理解することを促している。本稿で示したように、社会科学における主要な概念である「国家」、「市民社会」に対する認識についても、新たな光を投射することになったといえる。さらに学際的な議論の活発化と同時進行するかたちで、既存の学問分野の再編や新しい研究領域の創設が生じており、各学問分野においてグローバルな視点と志向性を持った研究が進展している。また従来の研究では分析対象となっていなかった事象を研究対象の事例として扱い、分析事例を重ねていくことで、さらに発展の可能性がある分野といえる。現在も各学問分野における議論を集約しつつ、新しい学問分野としての共通理解を育む研究とともに、

教育においてもその実践的な試みが生じている。

今後の方向性としては、これまでの学際的な議論をふまえつつ、多くの事例の分析を行い、グローバルな視点で長期的に社会変動を捉えていく研究が中心になると思われる。学問分野としてのグローバル研究の課題としては、これまで方法論については、必ずしも十分に議論がされていないことが挙げられる。グローバル研究は、現在も発展段階にあり、既存の社会科学の各学問分野における分析方法を採り入れつつ、研究が行われている状況にあるが、既存の学問分野において、体系的に構築されてきた理論および方法論をどのように評価し、取り入れつつ、分析方法を確立していくのかという点をさらに議論する必要がある。今後も様々な事例の分析を重ねつつ、方法論の議論をさらに深めていくことで新たな知見とともに学問分野として新しい地平を拓くことが期されている。

参考文献

- Appadurai, Arjun. 1990. "Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy" *Theory, Culture, and Society* 7(2-3): 295-310.
- _____. 2001. "Grassroots Globalization and the Research Imagination" Arjun Appadurai ed. *Globalization*. Durham: Duke University Press.
- Brubaker, Rogers. 2015. "Migration, Membership, and the Nation-State," *Grounds for Difference*. Cambridge: Harvard University Press, pp.131-144. (=2016. 佐藤茂基 他 編訳「移民、メンバーシップ、国民国家」『グローバル化する世界と「帰属の政治」』明石書店.)
- Cohen, Jean. 2012. *Globalization and Sovereignty: Rethinking Legality, Legitimacy, and Constitutionalism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gordon, Andrew. 2012. *Fabricating Consumers: The Sewing Machine in Modern Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Hunt, Lynn. 2014. *Writing History in the Global Era*. New York: Norton. (=2016. 長谷川貴彦 訳『グローバル時代の歴史学』岩波書店.)
- Robertson, Roland. 1992. *Globalization: Social Theory and Global Culture*. London: Sage. (=1997. 阿部美哉 訳『グローバリゼーション 地球文化の社会理論』東京大学出版会.)
- Sassen, Saskia. 1999. *Losing Control?: Sovereignty in an Age of Globalization*. New York: Columbia University Press. (=2004. 伊豫谷登士翁 訳『グローバリゼーションの時代—国家主権のゆくえ—』平凡社.)
- _____. 2001. *The Global City. New York, London, Tokyo*. Princeton: Princeton University Press.

(= 2008. 伊豫谷登土翁 監訳『グローバル・シティー—ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房.)

_____, 2006, *Territory · Authority · Rights: From Medieval to Global Assemblages*. Princeton: Princeton University Press. (=2011. 伊豫谷登土翁 監修、伊藤茂 訳『領土・権威・諸権利—グローバル化・ステディーズの現在』明石書店.)

Urry, John. 2000. *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-First Century*. New York: Routledge. (= [2006] 2015. 吉原直樹 監訳『社会を超える社会学—移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.)

グローバル研究の課題と展望
—社会科学における学際的議論に関する一考察—

太田 有子

<要旨>

本稿は、近年のグローバル研究（Global Studies）に関する研究動向を概観するとともに、グローバル研究の意義と課題、今後の方向性について論ずる試みである。グローバル研究は、グローバリゼーションをめぐる議論とともに発展しており、近年では、より長期的な視点からグローバリゼーションを捉え直す議論も生じており、その影響の多方向性と多様なあり方について論じられている状況にある。本稿では、社会科学分野におけるグローバリゼーションおよび諸現象に対する認識のあり方をめぐる議論にふれ、グローバル研究が学際的に発展している状況をふまえつつ、主な論点と課題について検証する。特に、近年のグローバル研究におけるグローバリゼーションと「国家」・「市民社会」概念の関係をめぐる議論をはじめ、グローバリゼーションを長期的な視点で社会変動として捉える研究を通じて提示された論点を検証し、今後のグローバル研究の課題と方向性について考察する。

**Global Turn in Social Science:
Critical Review of Agenda and Approaches in Global Studies**

<Summary>

Ariko Ota

This paper reviews the recent trends in global studies and discusses agenda and possible approaches for future analysis in a global perspective. While the global studies developed through discussions across the disciplines in social science, scholars discussed the origin, process, and impacts of globalization as well as the approaches to understand the phenomena. While this paper defines globalization as dynamics of relations and activities that go across the boundaries, it specifically analyzes discussion on the concepts of “state” and “civil society” along with globalization. Through a critical review of major works in global studies, the paper shows how the concepts of “state”, “civil society”, and “citizenship” have been redefined in a global perspective along with discussions of globalization. This paper also discusses how historical approach has changed the understanding of globalization from a social phenomenon to social change that requires us to have a long temporal frame of analysis. While the global studies emerged through interdisciplinary discussions on globalization, it would further need to strengthen theoretical and methodological grounds for a further development.